

	<h1>ふくりゅう</h1>	特定非営利活動法人 日本水循環文化研究協会会報
		発行責任者 酒井 彰 (理事長)
		令和5年5月31日 通巻109号

<b>ふくりゅう 109号 目次</b>	
2023年度研究発表会プログラム	1
講演会報告	
「縁の下の未来学－人糞地理学から考える「環」の世界」	2
研究成果とアートの展覧会 「なもなきながれ」	3
理事の自己紹介	4
海外技術協力活動のための助成金応募について	5
理事会より	5
編集後記	6

## 2023年度研究発表会プログラム

2023年度定例総会の開催については、ふくりゅう108号でご案内しておりますように、6月24日(土)に開催いたしますが、当日午後、同じく新宿区NPO協働推進センター(501号室)において、第2回水循環文化研究発表会を開催します。論文募集につきましては、

同じく、ふくりゅう108号でご案内いたしましたところ、6編の応募がありました。そのプログラムを掲載します。今回は、ひとつの部屋で行うことといたします。総会に引き続きご参加いただき、質疑応答に加わっていただきますようご案内申し上げます。

開会  
開会あいさつ

13:20  
理事長 酒井 彰

	氏名	所属	題目	時間
水文化史／水循環健全化活動／水循環管理				(座長：清水 康生)
1	柴田 尚	仙台・水の文化史研究会	四ツ谷用水をもとめて！※	13:30～
2	梅林 厚子* 寺脇 敬永* 石田 俊夫* 酒井 彰**	*大野の水環境ネットワーク **日本水循環文化研究協会 (発表者調整中)	水循環とその健全性に関わる社会的要因－大野市を事例として	14:00～
3	垣内 浩樹* 植田 隆司* ○伊藤 勝** 三村 友也**	*大阪狭山市水資源部 **株式会社日水コン	大阪狭山市水循環計画の作成プロセスとその特色について	14:30～
4	高橋 邦夫	日本水循環文化研究協会	水循環と源流域	15:00～
5	稲場 紀久雄	日本水循環文化研究協会	水循環の健全化に関する研究 (その1) 水と貨幣	15:30～
誌上	藤木 修	京都大学経営管理大学院	水循環とエリノア・オストロムの思想	

※ 本論文につきましては柴田氏の承諾を得て、渡辺 勝久氏(本会理事)が代読いたします。

開会

16:00 (予定)

## 講演会報告

## 縁の下の未来学—人糞地理学から考える「環」の世界

2023年2月24日(金) 18:30~20:30、東京ボランティア・市民活動センター(飯田橋セントラルプラザ10階)にて、法政大学人間環境学部 湯澤規子教授をお招きしての講演会を開催いたしました。参加者はZOOM参加を含め約20人でした。

講演主旨は、次のとおりです。「私たちはいつから、「衣食住」と「便」を切り離し、遠ざけるようになったのでしょうか。本講演では、排泄や循環の近現代史を辿りながらその謎に迫り、未来を展望する「縁の下の未来学」を構想してみたいと思います」

当日の講演は、

1. Lifeの発見、
2. 縁の下から考える環境史、
3. 日本と世界—縁の下の過去・現在・未来、
4. Human Ecologyの再発見

から構成されました。

まず産業史研究の一環として、愛知県尾西市の廃業した毛織物工場の経営資料、経営帳簿を整理する中で、「肥料渡し帳」に注目します。そして女工さんのウンコとタクアンに加工された農家のダイコンとの10年間ぐらいにわたる売買記録を復元したのです。時代は、大正期、ウンコとタクアンという小さな循環の環をとおしたLifeの発見、それは、縁の下から考える環境史へと続きます。

江戸期中期、大蔵永常の『農稼肥培論』に記された「凡、農業の内にて最も大切にすべきものは、糞壤を選ぶなり」に記された糞壤、かつての糞(畑に両手でまく肥えた土)が、尿(米のしかばね)に替わっていったのはいつ頃から、また何故なのか。

糞と尿尿は同じ物質なのに、利用と処理の間でせめぎ合いへと移行していきます。1900年、汚物掃除法が制定され、この時、糞は汚物の対象外でした。1910年には、必要に応じた処理に改正され、ついに1930年の改正では、尿尿は汚物になりました。人糞すなわち有益な下肥が、要らない尿尿に名前を変えて、屍としてしか見られなくなったのです。ひとえに都市への人口集積、汚物負荷の集積が自然の持つキャパシティを超えたこと、処理技術が追い付かなかったことによります。

次に日本と世界—縁の下の過去・現在・未来では、日本における下水処理システムと再生水や汚泥の循環利用、コンポスト循環事例などの紹介。米国ボストンMITでの体験をとおして、産業革命期の米国では、

環境は外部性と認識されていたこと。尿尿に関わる生活文化が世界的にいかにも多様であるかなどが紹介されました。

そして、Human Ecologyの再発見へ、人間活動と自然環境とは相互に関連しており、糞の資源循環、「環」の世界への展開を意味します。「地球は一つの宇宙船」と考えるフラーの『宇宙船地球号操縦』を紹介し、ずっと乗り続けていくためには、循環が破綻しては成り立たないことを確認すること、とともにそこに大きな可能性があるかもしれない。

今、SDGsのDevelopmentのDをLivingに変えたらどうか。LifeでもLocalでもいいけれど、Lという字に変えて、下からの環境学、縁の下の未来学ということを発想してみたらどうだろうと、と締めくくりました。

この後の座談会では、次のお二人の発言を中心に記します。まず、三鷹で農業をしながらコンポストアドバイザーとして全国的に活躍されている鴨志田さんから、畑と食卓の繋がりを感じさせる循環型農業の体験を伺いました。家庭の生ごみを市民が持ち寄



講演会写真

り、作物を市民に送り返すという、まさに講演冒頭のダイコンの例です。そしてこれから人糞の堆肥化に目を向けていくことの重要性を喚起されました。

この後、雨水市民の会の人見さんから、まず、畜糞、人糞を区別するのではなく、排泄物はまわりまわって人糞に至ることの認識の重要性が指摘されました。そのうえで、現在社会がたどり着いた文明に対し、後

始末の文明論を語られ、明日にでも人類が消滅しかねない現実にとどのように取り組んだらよいか。問題は非常に複雑に連綿として絡んでおり、そのためには、大きな包括の中でエコロジーを捉えていくことの展望が示されました。（高橋邦夫記）

※ 本講演の講演録はホームページからお読みいただけます。また機関誌に掲載予定です。

## 福永研究室・流域デザインスタジオによる 研究成果とアートの展覧会「なもなきながれ」

昨年の研究発表会シンポジウムにパネリストとして登壇いただいた東京大学大学院新領域創成研究科福永真弓准教授による研究成果ならびにアートを展示するイベント「なもなきながれ」が、2023年5月27～28日、東京大学・柏の葉キャンパス駅前サテライトで開催されました。この研究ならびにイベントは、水・地域イノベーション財団の助成により行われたものです。

この研究の問題意識は、「都市化ならびに整備された水インフラは、水を人々の関心から遠ざけているが、気候危機の時代を迎え、水とともに生きる感覚や知恵を育てていくことが求められている」、ということでした。このため、東大柏の葉キャンパス周辺の再開発が進み続けている都市郊外地域を対象に、いくつかのサブエリアごとに、土地利用や水資源の開発の履歴、地形、水域の変化を重ね合わせ、地域ごとの人々と水との関わりの特徴を探り、水を「感じる・知る」という二つの行為の相互作用が得られるような地図づくりが試みられています。

これらは、地域の水を含めた「場所への感覚」を培うことにつながようとしているわけですが、ここで、アートは水を知覚する感覚を拓くためのツールとして登場します。

郊外の新市街地に移り住もうという人たちは、その土地に対して「疎遠な他者」といった存在であり、足元の暗渠を流れる水の存在を感じることもないと思われがちです。そうした人たちの「場所への感覚」を育もうとしたとき、ことばによる説明だけで理解を促すのは容易なことではなく、水の流れを知り、アートで感

覚を増幅し、知ること、感じることをスパイラル的に繰り返すことが必要で、マッピングもその媒体になるのだろうと理解しました。

展示されたアートは、触れることで水を想起させ、サウンドスケープが聴けるもの、自然素材で書かれた絵、体験的に泥水で絵を描けるコーナー、研究フィールドにおける人工的な水の流れに沿って水を運び、放流する映像、世界の都市の現在の天気に応じて、変化する映像などでした。我々が、五感を研ぎすます機会



会場前の案内



展示会場

を失っていくなか、アートの力が求められるのかもしれない。福永先生のネットワークの広さに改めて驚きを感じました。

なお、流域デザインスタジオとは、福永先生が所属する研究科で行われている「環境デザイン統合教育プログラム」のひとつで、大学院の講義として行われ

ています。河口域・沿岸から川、集水域全体を含む「流域」という単位で、歴史的な文脈も含めて【人—社会—自然】の関連をとらえようとするものです。そのなかで、流域の多様な機能や社会空間としての位置づけを考えることを通じ、水と人間の関係を考察することを目的としています\*。

(酒井彰記)

\*<https://www.k.u-tokyo.ac.jp/assets/files/sousei41/#page=7>

## 理事の自己紹介

宮本 博司

株式会社樽徳商店 取締役参与

樽徳商店は、京都駅から清水寺の方向へ歩いて10数分のところにあります。昔は酒樽を製造販売していました。60年ほど前に樽造りから容器包装資材の代理店に移行して現在に至ります。

店の前には高瀬川が流れています。昔は、高瀬舟で運ばれてきた吉野杉で酒樽を造り、高瀬舟で京都市内や伏見の酒屋さんに届けていました。高瀬川の舟運は大正9年になくなりましたが、船を下流から上流に引き上げる綱引き人夫さんが通った通路跡が当時を偲ばせてくれます。

高瀬川の畔で育ったからという訳ではありませんが、私はたまたま大学で水理学を学び、建設省に入省し、たまたま最初の任地の長野県伊那谷で、天竜川流域の河川、砂防にかかわる調査や計画に携わりました。それ以来、川やダム、計画策定や水利権審査等、川にかかわる様々な仕事を法令やマニュアルに従って愚直にやっていました。

大きな転機を迎えたのは1990年に岡山県の苫田ダムへの異動でした。水没住民の方々と出会い、ダム建設がこれほどまでに住民を苦しめ、傷つけるものであるのかと大きなショックを受けました。さらに苫田ダムから異動した長良川河口堰では河川行政への不信感を強烈に感じました。その後本省を経て淀川に赴任し徹底的に現場に漬かり、これまで法令やマニュアルに従ってやってきたことが根本的に誤っていたことに気づきました。そして新河川法（1997年改正）に基づき設置した淀川流域委員会の運営を通して、住民意見を真に反映できる河川行政への転換に取り組みしましたが、2006年道半ばで職を辞さざるを得なくなりました。退職後も、何やかやと川にかかわっていましたが、ちょうどその頃稲場前代表に声をかけていただき、水循環基本法制定に向けての検討会に参加することになりました。それから現在

に至るまで稲場さんの熱い想いに引っ張られてまいりました。このようなご縁で、この度本協会の理事を拝命することとなりました。

さて、2014年に制定された水循環基本法では健全な水循環とは、「人の活動及び環境保全に果たす水の機能が適切に保たれた状態での水循環」と定義され、「健全な水循環を維持し、又は回復させ、我が国の経済社会の健全な発展及び国民生活の安定向上に寄与すること」が法律の目的であると定められています。はたして、人の活動、我が国の経済社会の発展、国民生活の安定向上に寄与する水循環が健全なのでしょうか。すごく違和感を持ちます。

水は太陽に温められて蒸発し、上空で雲となり、やがて雨となって地上に降り注ぎ、土中に浸透したり、川となって流下し、再び蒸発します。上空で水蒸気が凝縮する時、水蒸気は地球上の生き物の活動により発生する排熱を大気圏外に放出し、地球に廃熱が溜まることを防いでいます。水循環は人類が地球上に発生するずっと前から繰り返されてきたものです。生き物が何億年にわたって命を繋げてきたのは水循環のお陰であり、私たちは水循環に従属した存在です。そんな私たちがその活動や経済社会の発展、生活の安定向上のために水循環を健全化するとはなんと傲慢なことではないでしょうか。水循環を狂わせてきたのは経済優先で目先の快適性や利便性を求める私たちの活動です。水循環の中で生かされていることを謙虚に受け止め、その中で生き物として命を繋いでいくという観点から、生き方を見直していくことが大切のように思います。

一昨年に樽徳商店を息子に承継し、現在は毎日、高瀬川畔の工房で桶や樽を造っています。京都にお越しの際には是非お立ち寄り下さい。お待ちしております。

## 海外技術協力活動のための助成金応募について

海外技術活動を継続していくためには、助成金申請は必須の手続きになります。本会では、今年度活動に向け、昨年12月に地球環境基金に「ひろげる活動」として申請しました。その申請した活動概要は、ホームページに掲載しています。しかし、残念ながら非採択となってしまいました。地球環境基金への申請では、先行活動(2019～2021年度)を通し、都市貧困層コミュニティにおいて、共同トイレ等の自立的な管理が十分機能していない原因を探るとともに、新たなコミュニティを対象として、水と衛生環境を改善するという3年間の活動提案を行いました。

しかし、先行活動の問題がどこにあったのかによって、その後の活動が規定されてきます。そこで、原因を明らかにすることにターゲットを絞った活動が短期間でできないかと思っていました。

このような折、水・地域イノベーション財団(旧称:日水コン水インフラ財団)による助成活動募集があり、4月20日に「都市貧困層コミュニティにおける水・衛生設備管理能力の向上」と題して応募しました。(活動期間10か月、助成申請額200万円)採択されるか否かは6月1日に判明します。

その活動概要は、以下の通りです。

「本活動は、都市貧困層コミュニティが、水・衛生設備などの共有設備の導入及び管理について、主体的に意思決定し、適切な社会資源にアクセスする自

立的な管理システムの構築、および同システムの普及を上位目標とする。本申請では、バングラデシュを対象地とし、設備管理を担うコミュニティ組織が中心となり、主体的に現状分析や改善策の検討および試験的活動に取り組めるような介入を目的とする」(申請書類のママ)。

これまでの活動では、現状分析、評価といったことや管理システムを外部者である我々が رفتり、決めたりして、それを現地のコミュニティに合意を求めるようなことをしてきましたが、そこに無理があったのではないかと考えています。今回は、コミュニティがその特性や能力に応じて、どこまでできるかも自ら決められるような方向性を志向し、試行できたらと考えています。

なお、今回、会員の菊池美智子さんが申請代表者になられています。菊池さんは、かつて本会が、JICAの根技術協力事業に応募する際、JICAのマッチングサイト“PARTNER”での募集に応募してこられた方です。バングラデシュでのテロ発生などがあって、JICAへの申請は採択に至りませんでした。その後の地球環境基金助成による先行事業でも共に活動しました。世代交代が叫ばれているなか、日本側も主役交代を進めていきたいと考えています。

(酒井彰記)

## 理事会より

### ● 総会資料送付について

総会開催につきましては、すでにご承知おきのことと存じますが、議案書等の配布を電子化したいと考えています。これまでは、定款上、電磁的方法による委任状の提出を認めていなかったため、正会員全員に委任状はがきをお送りし、併せて議案書も送っていました。

今回の定款改正において、電磁的方法による委任ができることになりました(29条)。そこで、ふだんメールに添付された会報をお受け取りになっている会員各位には、議案書を電子メールに添付してお送りすることといたします。表決の委任については、委任フォームを作成しメール

### ● 総会のリモート出席による表決も可能になりました

昨年までは、リモートでは、傍聴することしかできませんでしたが、定款改正により、リモート出席が正式に出席者としてカウントされ、表決も可能になりました(27条)ので、

### ● 小冊子版水循環教材をお送りします

前号でお知らせしましたが、4月上旬に水循環教材を刊行いたしました。その、表紙、まえがき、目次をホームペ

ージに送らせてもらいます。また、電磁的方法による表決も可能です。(様式は任意とします)

会費納入につきましては、先日お問い合わせフォームを送らせていただきましたように、メールで会報を受け取られている会員各位には、お知らせする口座番号に振り込んでいただきたいと考えておりますが、従来通り、払込伝票で支払いを希望する方はお知らせください。

なお、ふくりゅうを郵送で受取られている会員の皆様には、従来通り、議案書、委任状はがき、会費請求書と払込伝票を郵送します。

ふるってご出席願います。出席の形態(会場、リモート)は、委任フォームでお尋ねします。研究発表会もリモートでの参加ができますので、こちらへの参加もお待ちしています。

すでに、名誉会員、評議員、ふくりゅう記事、ホームページをご覧になって希望された会員

の方には送らせてもらっていますが、順次すべての正会員・特別会員にお送りするようにいたします。届きました

ら、ご感想などお寄せいただきますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

### 編集後記

湯澤先生の講演会で久しぶりに人見達雄さんにお目にかかった。ゼロトイレで高橋朝子さんと一緒に講演していただいた時以来だった（ふくりゅう 95号参照）▶しかし、人見さんのお名前は、最近読んだ大野市の地下水保全運動の記録「よみがえれ、命の水」のなかで拝見していた。クリーニング作業場におけるテトラクロロエチレン汚染を調査し、市の担当者に対策を指示されていた。市民が化学物質を扱う企業の誘致に反対し、裁判に訴えたときにも支援された▶その人見さんが講演会でディビッドと呼んでいたのは、デイビッド・ウォルトナー＝テープスというカナダ人で国境なき獣医師団の創設者。彼が著した「排泄物と文明」を読む。原題は *The Origin of Feces* で副題的に「排泄物が“進化”“エコロジー”“持続可能な社会”について我々に語るもの」とある。一読をお薦めしたい▶最近本会が発行した水循環教材で、バーチャルウォーターには言及したが、食のグローバル化が進んだ今、日本が食の輸入

を通して海外に依存するのは水資源だけではなく、土地も廃棄物の始末も依存しているのだ。大量の畜糞もそれぞれの生産地で適正処理が行われているとは言えず、多様な生きものの働きで人間が享受している生態系サービスを台無しにしている。ディビッドの表現では「クソの山にしている」▶バングラデシュの沿岸域でどこまでも続く持続可能とは言えないエビの養殖池、ケニアの湖岸のスラムで魚の骨を焼く何とも言えない臭い。これは、輸出のために魚を放流し、生態系のバランスを崩しただけでなく、衛生的とは言えない加工した魚の廃棄物の後始末も現地に押し付けた結果生じた悪臭だ▶講演会での議論の輪から、一つひとつは記憶にあっても、バーチャルウォーターと同根の問題であるということに気付く想像力に欠けていたことに気付かされた。

(酒井彰)

#### 特定非営利活動法人 日本水循環文化研究協会

〒101-0027 東京都千代田区神田平河町1番 第3東ビル710号室  
TEL 03-5829-5843 e-mail: jade@jca.apc.org npo.jade@gmail.com  
URL: <https://npo-jade.com> ← リニューアルされました！  
Facebook: <http://www.facebook.com/groups/jadejapan/> ← メンバー登録を！